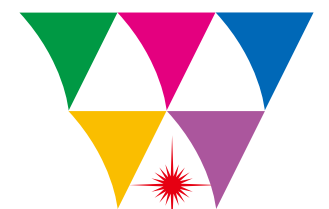


# 開港5都市 景観まちづくり会議 横浜大会 2014

2014年10月17日(金)～19日(日)

開催記録▶▶▶

開港5都市のみらい  
これからもヨヨヨから



開港5都市  
景観まちづくり会議



横浜大会2014では、これまでの大会の流れを受け、「開港5都市のみらい これからもココから」をテーマに、多様な文化が共生するまちの歩みについて一緒に考えました。開港の文化だけでなく、一味違った横浜の顔にも触れていただきました。

都市を取り巻く環境が厳しさを増してきている中で、開港都市が「開港の地らしさ」を保つことが難しくなっています。その一方で、新たな景観まちづくりの活動が生まれてきています。その景観まちづくり活動の現場を横浜で体感し、開港5都市の皆様が交流を深める有意義な大会になったのではないかと思います。このような横浜大会2014に参加された皆様、開催を支えていただいた横浜大会実行委員会の皆様に感謝申し上げます。

開港5都市景観まちづくり会議も今年で20回目を数え、この間に開港5都市の市民相互の交流の輪も大きく広がってまいりました。これを私たちの大きな財産として、これからもお互いに良いところを学びあい、魅力と個性のあるまちづくりに活かしていくことを期待しています。

開港5都市景観まちづくり会議 横浜大会実行委員会  
会長 山口和昭

## 目次

スケジュール	1
全体会議 I (パネルディスカッション)	2 ~ 5
ウェルカムパーティー	6 ~ 7
分科会 I	8 ~ 9
分科会 II	10 ~ 11
分科会 III	12 ~ 13
分科会 IV	14 ~ 15
オプションルツアー	16 ~ 17
代表者会議/全体会議 II	18
大会宣言	19
開港5都市景観まちづくり会議の沿革	20
各都市参加団体/実行委員会構成団体	21

## スケジュール

### 10月17日(金)

- ◆全体会議 I 14:00~17:00  
会場/横浜市開港記念会館 講堂(中区本町1-6)
  - ・主催者、開催市挨拶
  - ・パネルディスカッション
- ◆ウェルカムパーティー 18:00~20:00  
会場/ローズホテル横浜(中区山下町77)
  - ・主催者、開催市挨拶
  - ・各都市挨拶

### 10月18日(土)

- ◆分科会 9:30~16:30  
会場/関内周辺各所
  - ・分科会 I ~ IV
- ◆オプションルツアー 18:00~20:00  
会場/田中家(神奈川区台町11-1)
  - ・料亭体験

### 10月19日(日)

- ◆代表者会議 9:00~9:30  
会場/横浜メディアビジネスセンター 会議室(中区太田町2-23)
- ◆全体会議 II 10:00~11:00  
会場/横浜メディアビジネスセンター  
アプローチ(ヨコハマNEWSハーバー)(中区太田町2-23)
  - ・分科会報告
  - ・大会旗引継ぎ、大会宣言





# 全体会議 I (パネルディスカッション) 「開港5都市 大学連携のまちづくり」



今回のテーマは「大学連携のまちづくり」。まちづくりに新たな視点をもたらす「ヨソモノ・バカモノ・ワカモノ」として、地域は学生の参加を歓迎しています。まちをフィールドに学ぶ彼らの姿勢をバックアップし、参加を継続するためには、地域と大学の連携が欠かせません。全体会議 I・パネルディスカッションでは、こうした視点から、開港5都市における大学連携のまちづくりの具体的な実践を紹介するとともに、地元団体側から連携に向けた期待と課題を発表し、今後の可能性について議論しました。

開港5都市景観まちづくり会議横浜大会は、横浜大会実行委員会会長の山口和昭さんと横浜市都市整備局長の平原敏英さんの歓迎のあいさつで始まり、パネルディスカッションでは、各都市からの大学連携に関わるまちづくり事例発表の後、横浜市立大学特別契約教授の国吉直行さんをコーディネーターとして意見交換が行われました。

## 【神戸市】..... 「震災復興からなる市民協働まちづくり」 三宮中央通りまちづくり協議会 永田 耕一さん

神戸市では1993年、市民活動に関わる団体の情報交換や親睦を図り、神戸の景観形成を推進することを目的に12団体からなる「神戸市景観形成市民団体連絡協議会」をつくりました。

私の所属する「三宮中央通りまちづくり協議会」は、阪神淡路大震災以降に実施された復興工事によって幅広くなった歩道を活用し、オープンカフェを春と秋に実施しています。この歩道利用に関しては、神戸市と道路活用協定を結んでいます。また、市民の絵画を壁面



に展示する「まちかど壁画プロジェクト」も行っています。商店街のシャッターや壁などへの落書きが問題となっており、商店街に市民から寄せられた絵画作品を飾ることで、落書き防止につなげています。

大学連携としては、岡本地区でつくった「美しい街岡本協議会」で、まちの特性を活かした屋外広告物のルールやガイドラインを神戸大学と連携して作成しました。

## 「学生と市民で連携するまちづくりの構築へ」 神戸大学 教授 三輪 康一さん

「美しい街岡本協議会」との連携のきっかけは、協議会の会長から「屋外広告物のルールを作りたい」と依頼があったことです。岡本地区にあった広告物の現地調査や地域住民とのワークショップを重ねることで、学生のモチベーションも上がり、学生から自主的にまちづくりの提案がありました。

地域にとっては、大学と連携することで外部の人、特に若者からの率直な意見を聞くことができます。それは、ずっとそこに住んでいた住民にとって、新鮮な視点として感じられるようです。



地域と大学のやりとりが「頼み・頼まれ」の一方通行的な関係ではなく、相互に影響を与えるような双方向的傾向につながることを期待しています。

## 【長崎市】..... 「深堀地区の景観まちづくり活動」 深堀地区まちづくり推進協議会 西 清さん

長崎市の深堀地区の景観まちづくりは「将来の子供たちに引き継げるようなまちを残す」ことをモットーに、3つの取組みを行っています。

まず第1に、全体が史跡のようなまちであるこの地区の「古いもの」と「新しいもの」がどのように調和できるのかについて、ワークショップを重ねています。

第2の取組みは、町内にある約70体の「恵比須像のマップづくり」です。恵比須様の情報を取りまとめたリストを作成し、その位置情報や地区内の恵比須像の写真を地図上に反映しています。

第3の取組みは、長崎大学と地元協議会で共同ワークショップを実施して策定した「深堀地区景観まちづくりガイドライン」です。

これらの実践のなかで一番大事なことは、大学生の若い世代、特に地域に関わりがなかった人達が入ってきて新しい深堀地区の魅力を発見してもらうことです。

## 「地域と連携し景観形成を考える」 長崎大学 准教授 渡邊 貴史さん

深堀地区と長崎大学でのまちづくり連携は、2011年に長崎市からまちづくりガイドラインの策定の打診を受けたのがきっかけです。

深堀地区は、長崎市南部にある城下町跡として歴史的な資源が多くあります。点在する歴史的な空間を散策するために「さるく(歩く)ルート」の見直しを行いました。

そして、ワークショップ内でビジョンの共有を行い、2014年に「深堀地区景観まちづく



りガイドライン」を完成させました。

若い学生が関わることでまちが活気づきます。住民は新たな気づきや発見が得られるようです。学生も実践の場が得られ、住民のみなさんと関わることで、コミュニケーション力がつくという成果もありました。

一方で大学とまちの連携においては、事故が起きた場合の責任の所在や社会活動を行う教員に対する大学の評価がまだまだ低いといった、大学側の課題などがあります。

## 【新潟市】..... 「川の流れと景観の変化」 新潟学の会 斎藤 栄路さん

新潟市は開港5都市の中で唯一河川沿いの港を中心に発達した都市です。阿賀野川と長良川といった河川や、日本最大級の砂丘がまちの景観をつくっています。

新潟市は埋め立ての歴史があり、大きな川を埋め立ててきました。昔は阿賀野川と信濃川がくっついており、内湾がありました。台風などが発生した際、内湾に避難できたので、港として発達することができたのではないかと考えられます。

また、新潟県全部の川の河口が、すべて新潟市に集まります。このような立地を活かして古くから港として栄え、新潟市は現在も国際重要港湾とされています。

## 「マップ作成からの大学連携」 新潟大学 教授 岡崎 篤行さん

新潟市は市民団体による「地図づくり」が盛んであることから、歴史的な建物を紹介する「まち遺産マップ」を住民のみなさんと協力してつくるプロジェクトに参画しました。

また、新潟市指定有形文化財に登録されている回船問屋「旧小澤家住宅」が博物館として活用されることになった際、より具体的な運営プランを作成・提案し、プロジェクトを実現しました。活動を続けていくうちに、地元商店街や市民団体も正式に関わることになり、「産博学民」連携事業として動いています。





まちづくりのプロジェクト企画は、ただアイデアを出すだけでなく、実現するために関係各所と個別の打ち合わせ・調整を行い、実現に向けて動きます。このプロセスが、学生にとってまちづくりの流れを学ぶ生きた機会になっています。

【函館市】.....  
**「五稜郭を世界遺産へ」**  
**函館の歴史的風土を守る会 佐々木 馨さん**



今年、函館・五稜郭が1864年に建造されてからちょうど150周年にあたります。五稜郭は日本初の西洋式城塞で、もとはフランス・パリ郊外のヴォーバン城塞がモデルになっています。

このヴォーバン城塞が2008年に世界文化遺産に登録されたことを契機に、函館市でも五稜郭の世界文化遺産登録を目標に活動する「五稜郭の文化価値を考える会」が立ち上がりました。

五稜郭については箱館戦争という歴史的イメージが強いのですが、私たちは五稜郭自体が持つ文化的な価値の次世代への継承や世界文化遺産への登録に向けて動いていきます。

**「異分野を融合させ、まちづくりの現場へ活かす」**  
**公立はこだて未来大学 教授 岡本 誠さん**



情報科学の分野でも、まちの中のサービスシステムのデザインなどでシステムユーザーの意見が必要になり、大学だけでは答えが出せないことが多くなりました。

そこで、大学の授業を街中教室等で行い、市民と一緒にワークショップを実施しました。市民の方と一緒に

考えた提案だと、参加者にとっても自分ごとになり、白熱したディスカッションとなりました。

今後、大学内だけでなくまちの中に教室を設けることで、市民の方々が先生となり、学生が現場の声を学び、双方刺激しあって函館の景観をつくっていかねばと思います。

【横浜市】.....  
**「歴史的な資源の活用と新たなまちづくりに向けて」**  
**馬車道商店街協同組合 六川 勝仁さん**

横浜市には横浜赤レンガ倉庫やコンベンションセンター(パシフィコ横浜)といった魅力的な施設が多くあります。そして、歴史的建造物がシェアオフィスや大学のサテライトキャンパスなどとして再活用されています。

現在のまちづくりの動きに関しては、ドーム球場やIR(統合型リゾート)などの大規模集客施設の整備を行い、新しい観光資源を創出していく検討をしています。また、建物や施設だけでなく、自転車のシェアを行う「ベイバイク」や小型EVの「チョイモビ」、市内河川を活用した水上交通の社会実験なども行っています。

**「長年の自治体とのつながりを活かしたまちづくりの提案」**  
**横浜市立大学 教授 鈴木 伸治さん**

横浜市は戦後の復興建築や防火建築帯の提案を行ったのが当時の大学教授であったこともあり、まちづくりと大学の連携は比較的古くから行われ、ハードルが低いのが特徴です。

開港150周年(2009年)には、横浜市と東京大学・横浜国立大学・横浜市立大学・関東学院大学・神奈川大学が連携し、50年後の都市臨海部・内港地区のビジョンを作成しました。

また、市民・企業と連携し、エリアマネジメントやまちづくりワークショップ・セミナーといった活動を積極的に実施しています。

大学連携を進めるにあたって、地域の企業やNPO団体をきちんとまとめていけるのか、責任を負いながら継続的に関わられるかが課題です。



【パネルディスカッション】

**「まちづくりにおける大学連携とは」**

地元団体側の意見としては「若者の視点で地域を見てもらうことは重要。まちづくりはシニア世代が中心になりがちだが、実際に使うのは次の世代。若者がまちづくりに参加することで、シニアと違う視点のまちの魅力の再発見につながる」といったまちの



コーディネーター：国吉直行さん

多面的な魅力の発掘に寄与する点で一致。

さらに「若者がまちづくりに加わると、シニア世代は気分がウキウキするし、面倒を見てあげなくなる」など、コミュニティが活

づくこと自体を歓迎する声も。また、「学生が卒業しても参加できるようなくみづくりが大切」「連携を円滑にするためには、大学と地域が接点を持つためのシステムが必要」など、まちづくり関係者側は持続的な関わりに期待を寄せており、大学側の体制整備を望む意見も出ていました。

一方、大学関係者からは「まちづくりに必要なのは人。卒業後、県内に就職の受け皿がなく、県外に出てしまう学生が多い。どのように若者を確保しつつ、大学連携を進めていくかが大切」「持続的にできるしくみを大学が提供できればと思う」など、まちづくりにおける「若者」の参加の入口としての大学の役割を自覚する意見が出されました。



ただ、「まちづくりへの参加はあくまでも教育・研究の一環であり、幅広くサポートするのが本来の立場。大学が長期的にまちづくりに関わるのは疑問」「行政の動きを大学が把握しているわけではなく、全体のマネジメントを担うのは厳しい」という意見も。まちづくりコンサルタントや市民の協力が必要であることや、NPO法人など多様なプレイヤーと協働することなど、持続的な連携をしていくにあたっての課題が出されました。

さらに「大学がまちづくりの担い手になれるか」という問いかけに対して、大学関係者は「まちづくりのプロジェクトごとに、立場を変えながら関わり続けることが大切。」「学生が大学にいる時間はとても短い。まちづくりのプロジェクトを持続的に行うためには市民が主体になる必要がある」「まちづくりは生活者が主役。大学ではない。ただ、自分たちの専門分野を生かし、地域に対してアドバイスすることはできる」など、主体的なまちづくりの担い手にはなれないものの「大学側の持つリソースを活用し、まちづくりをサポートできる」という意見が共感を集めていました。

最後に、地域の状況をふまえ、開港5都市において、大学連携が積極的に行われている状況を共有

しました。その上で、国吉さんは、大学は「サポート役として、地域の魅力を盛り上げるまちづくりの担い手になりうる」と指摘しました。さらに、横浜でも積極的にまちづくりのフィールドに参加する大学生が増え、多様な人達とのコミュニケーションを通じ成長している手応えを感じていると、実践的な学びの場としての価値について言及しました。

そして、「5都市の大学連携の取組みは素晴らしい。それぞれの活動が各都市で連携・共有され、市民にとってより良いまちづくりの発展につながることを期待したい」とまとめていました。





## ウェルカムパーティー



ローズホテル横浜で、およそ120名が一堂に会し、ウェルカムパーティーを実施しました。参加者らは、日本最大の中華街の中にある同ホテル自慢の中華料理を味わいながら、獅子舞を楽しむなど「横浜スタイル」でもてなしを堪能しました。今回、会議が節目の20回目ということもあり、継続的に参加している関係者らが再会を喜ぶ場面もありました。お互いの活動・情報交換の場としてウェルカムパーティーは盛り上がりました。

ウェルカムパーティーは、紀あささん(横浜市在住・はこだて観光大使、てまわしオルガン奏者)の演奏で始まり、続けて主催者挨拶、開催市挨拶が行われました。そして、函館の歴史的風土を守る会の佐々木馨さんの乾杯でホテル自慢の中華料理が始まりました。歓談の間には各都市の挨拶やNPO法人新潟水辺の会の森本利さんのギターによる「ウェルカム港街」の合唱、宝田博士さんをはじめとする協同組合元町エスエス会による横浜のまちづくりの取組紹介が行われました。また、アトラクションの獅子舞が会場を大いに沸かせました。

パーティーのお楽しみでもある各都市のお土産には、函館の活イカ(刺身とげそ揚げ)と珍味・まんじゅう、新潟の日本酒と笹団子、横浜のラムボール、神戸のワインと紹興酒、長崎のカステラが登場しました。



### ■主催者挨拶 ..... 開港5都市景観まちづくり会議横浜大会実行委員会 会長 山口和昭さん

みなさま、遠路はるばるお越しいただき、ありがとうございます。開港5都市景観まちづくり会議は今回で20回目を迎えます。

本日のウェルカムパーティーですが、横浜ならではのおもてなしでお迎えいたします。パーティーや分科会を通して各都市の情報を共有し、持ち帰って、みなさんのまちづくりにとって有意義な会にいたしましょう。



### ■開催市挨拶 ..... 横浜市 鈴木伸哉 副市長

今年は開港5都市景観まちづくり会議が20回目を迎えますが、日米和親条約を締結して160年目の年でもあります。この間、さまざまな社会環境の変化がありましたが、各都市は魅力あふれるまちづくりを進めてまいりました。その成果が



今のまちに反映されていると感じます。

今、人口減少・少子高齢化など、われわれはこれまで経験したことのない課題に直面しています。これらの課題を乗り越えるためには、港を持つ5都市が連携し、それぞれの都市に適したまちづくりを進めていくことが必要です。あわせて、大学など多様なステークホル

ダーと連携し、議論を重ねていくことも求められます。

ぜひ、この会議で有意義な意見を交換し、それぞれの都市に成果を持ち帰ってまちづくりに生かしていただければと思います。





## 分科会 I 港と未来 「線(ネットワーク)と点(クロス)賑わいの連携」



開港の地である象の鼻・横浜港大さん橋国際客船ターミナル付近は、横浜そして日本の近代が始まった「原点」である大切な場所です。港町・横浜の歴史を生かしたまちづくりを未来につなげていくためにも、開港の地を知ることは重要です。分科会 I では、「インナーハーバー」といわれる横浜港湾内を船でめぐって実際の風景や場の特徴・歴史を確認し、まちづくりの現場で活躍するキーパーソンに活動について説明を受け、各都市の方々と意見を交換しました。

レクチャーに先立ち、会場となった横浜港大さん橋国際客船ターミナルの金木伸浩さんが、メインフロア(2F)の「くじらのおなか」と、屋上「くじらのせなか」をガイドしながら、ターミナルの機能を説明しました。その後、一行は、ミニレクチャーをスタートしました。

### ■ミニレクチャー 1 ..... 「大栈橋の歴史」 大さん橋国際客船ターミナル 統括責任者 金木 伸浩さん

大さん橋は1894年3月31日に完成しました。金木さんは、港として重要な機能であるさん橋機能が、1859年の開港から35年も経過してから建設されたことについて関心を持ちました。



金木さんによると、明治政府には長州藩(山口県)と欧米4国が衝突した下関戦争の賠償金支払いの負担が重く、築港計画は何度も頓挫。アメリカの南北戦争で勝利した北軍の将軍で、後に大統領となったユリシーズ・グラ

ントが日本訪問後、賠償金返還方針を固めたことが、大さん橋建設への大きな追い風になったのではないかとのことです。

竣工当時の「鉄栈橋」は陸地からの総延長738メートル、栈橋部分は457メートル、幅19.2メートル。当時の技術で最先端を行く近代栈橋ができました。

それから120年。2002年に現在の「大さん橋国際客船ターミナル」が竣工し、クイーン・エリザベスなど、クルーズ客船の一大寄港地になっています。金木さんは地図で位置を示しながら、横浜港の中心・玄関口として位置する大さん橋が、これからの横浜の海辺のまちづくりにおいて発信・交流拠点としての役割を果たしていく重要性を強調していました。

### ■ミニレクチャー 2 ..... 「世界の美港都市横浜をめざして」 一般社団法人美港都市横浜を創る会 理事 近藤 裕之さん

近藤さんは、国内外の事例をひきながら、ベイブリッジ内陸部の「インナーハーバー地域」のまちづくりについて提案しました。

まずインナーハーバー地域の価値や将来像について「市民憲章をつくり景観意識の底上げを図ることが重要だ」と、港に対する関心の醸成と共有がまちづくりの基本にあることを強調しました。その上で「『トランジットコム』という交通



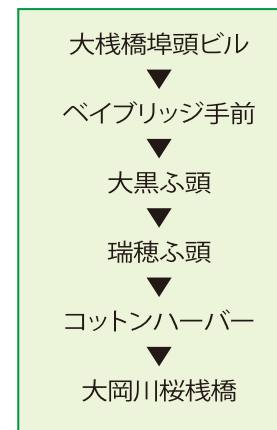
のハブを整備し、そのハブとハブをつなぐように様々な交通手段で地域を有機的に結びつけることで、にぎわいがつながっていく」という提案が、様々な写真資料とともに提示されました。

さらに近藤さんは、インナーハーバー地域を「山下ふ

頭」「大栈橋・象の鼻・海岸通り」などの5つの拠点エリアに分けたうえで構想を披露しました。その際も「たとえば、『北仲通り北』は運河・水際の動線を生かした整備を行うなど、地域の特性や歴史を織り込んだプランにすることが大切」と、景観創出のポイントを説明しました。

近藤さんは「今後も活動を通じて横浜市に美しい港のあり方を提言していくとともに、広く市民の間に議論を喚起していきたい」と話していました。

### ■港回遊 ..... 屋形船に乗船した参加者は、横浜の代表的なスポットを海上から眺めつつ、昼食をとりました。屋形船は、米海軍の船が係留されている瑞穂ふ頭などに接近。ミニレクチャー2で言及された地域に、実際に船で行くことで学びを深めました。



### ■まちあるき ..... 下船後、一行はまちあるきに出発しました。黄金町では、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター事務局長の山野真悟さんの案内で、京浜急行の高架下のギャラリーなどを見学。さらに、横浜を代表する商店街の一つである伊勢佐木町に向かい、協同組合伊勢佐木町商店街理事長の牛山裕子さんなどからまちの歴史や現状について説明を受けました。



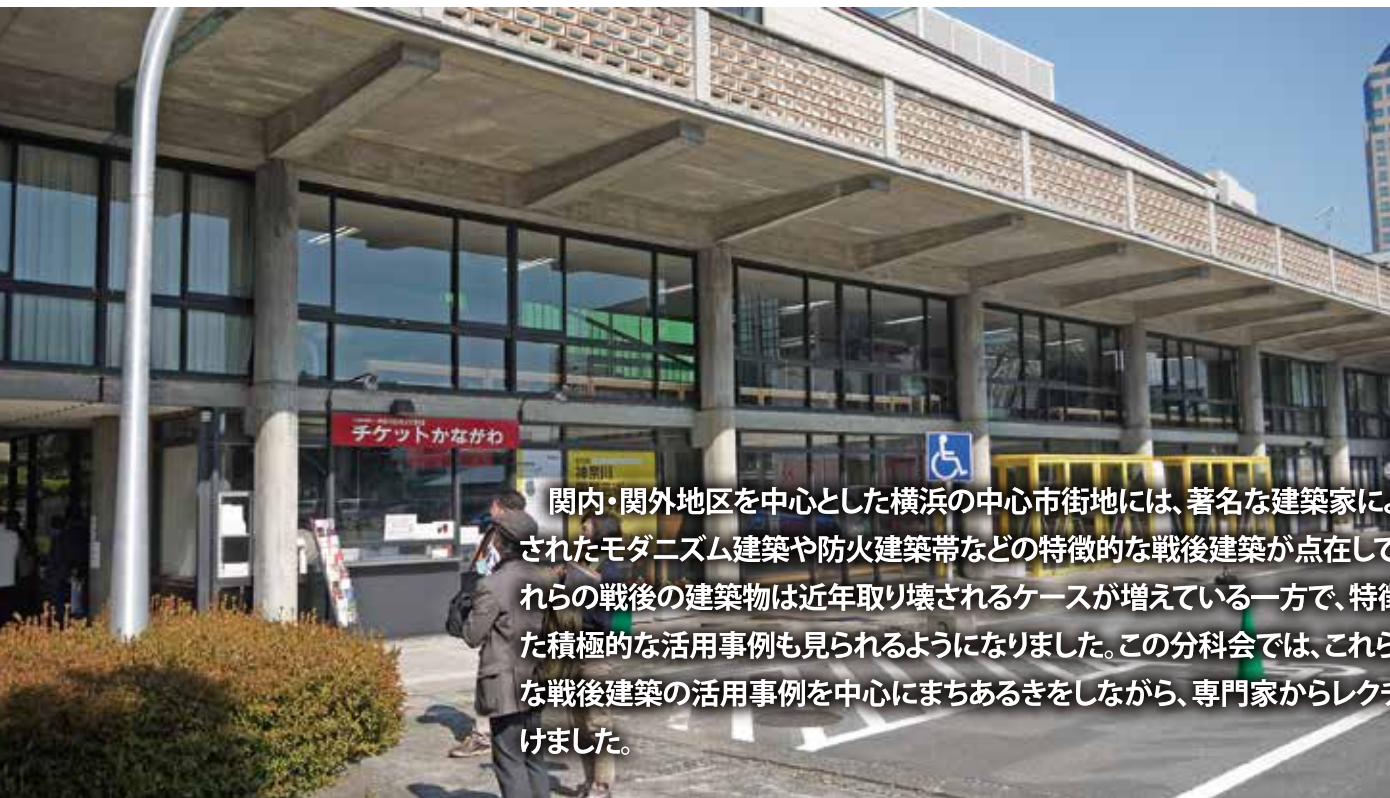
最後は、伊勢佐木町のMall to Courtで、「港のこれから」をテーマに一般社団法人美港都市横浜を創る会理事の山中良子さん、安部定さんを進行役に、海とまちとつなぐ「点」とネットワークのあり方について振り返りを行いました。他都市の参加者からは、観光ガイドブックでは紹介されない黄金町のまちづくりや大岡川流域について評価する声があ

がっていました。





## 分科会Ⅱ 歴史を生かしたまちづくり 「戦後建築の活用」



関内・関外地区を中心とした横浜の中心市街地には、著名な建築家によって設計されたモダニズム建築や防火建築帯などの特徴的な戦後建築が点在しています。これらの戦後の建築物は近年取り壊されるケースが増えている一方で、特徴を生かした積極的な活用事例も見られるようになりました。この分科会では、これらの特徴的な戦後建築の活用事例を中心にまちあるきをしながら、専門家からレクチャーを受けました。

### ■ミニレクチャー1 .....

#### 「神奈川県立音楽堂・図書館の話」

神奈川県立音楽堂 館長 伊藤 由貴子さん  
神奈川県立図書館 副館長 山本 長史さん

音楽堂は、「近代建築の3大巨匠」であるル・コルビジェの下で建築を学び、数々の公共建築を手がけてきた前川國男が設計し、1954年に竣工しました。このホールは「東洋一の響き」と言われ、国内外の演奏家から高く評価されています。課題は、老朽化に伴う修繕問題です。伊藤さんは「音楽堂の建築や音響、60年にわたる公演の蓄積は替え難い地域の文化資産。バリアフリー等の課題もあるが、社会のニーズに対応しつつ、長く使い続けていきたい」と話していました。



### ■レクチャー .....

#### 「戦後建築の活用とその事例」

(株)山手総合計画研究所 代表取締役 菅 孝能さん

横浜の中心部は、太平洋戦争時の空襲(1945年5月29日)によって焼け野原になりました。1952年、GHQ(連合国最高司令官総司令部)による7年間の接收が解除され、まちづくりが本格化しました。

その後、戦後の復興事業として、鉄筋コンクリートの建物を用いて防火対策とする「防火帯建築」が1950-60年代に集中的に建設されました。防火帯建築は、1階が店舗、2階が事務所、3~4階が住居スペースという中層建築です。

また、前川國男による神奈川県立音楽堂、村野藤吾による横浜市庁舎など、横浜には有名なモダニズム建築家による戦後の公共施設がいくつかあります。

そうした歴史ある地区ですが、近年は空洞化が目立ちます。また、関内地区にある横浜市庁舎が北仲地区に移転する計画も進んでおり、跡地利用が課題になっています。

活性化の1つの対策として、菅さんは「芸術不動産事業」を挙げました。これは、公益財団法人横浜市芸術文化振興



財団が実施している事業で、古い建物をアトリエ・事務所にリノベーションして若いアーティストなどの創造的な人々の拠点として活用する事業です。

また菅さんは、ビルのリノベーションを行い、シェアオフィスとして活用する事例も紹介しました。「古い建物を使う知恵を出し、新しい個性が繋がって使い続けることにより、横浜の歴史が受け継がれていくことが大事」と話していました。

### ■ミニレクチャー2 .....

#### 「歴史遺構の保存と活用」

(株)三陽物産 代表取締役社長 山本 博士さん

横浜都市発展記念館の中庭には、国内最古のガス管などの都市発展の歴史を記録する遺構が保存されています。山本さんは、これらの遺構の保存の経緯やその意義をテーマに講演しました。

関東大震災や横浜大空襲で横浜は多くの歴史的建造物を失いましたが、幕末明治期の物は、地中に遺構として今なお多く残っています。今でも開発工事で地面を掘り起こすと、貴重な遺構が発見されます。しかし、発掘された遺跡は保存されずに破壊されてしまうのが現状です。

山本氏の母校である本町小学校で校舎を増築した際に、日本初のガス事業を興した「横浜瓦斯会社」の国内最古のガス管が発掘されました。しかし、ガス管そのものは記録保存を行っただけで取り壊されました。山本氏は「自分の母校で歴史ある文化財が発掘されたのに、保存されないのはおかしい」と思い、ガス管の一部を取得、横浜都市発展記念館で収蔵展示するために寄贈しました。

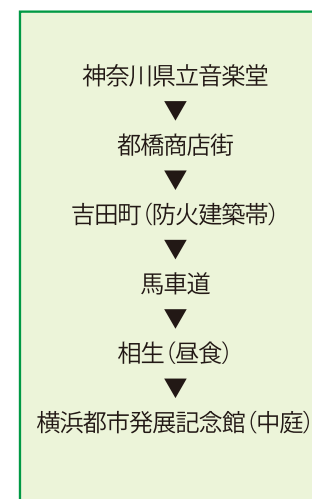
「横浜の町の成り立ちを教えてください。重要な遺跡が保存されないのは問題。多くの人が横浜の歴史を知る一環として触れ合えるように活用方法を考えてほしい」と山本氏は話していました。



### ■まちあるき .....



神奈川県立音楽堂でのミニレクチャー1の後、「ハーモニカ横丁」で知られる野毛・都橋商店街と、横浜の戦後建築を象徴する防火建築帯のある吉田町を中心に、横浜の歴史を感じる建造物を巡るまちあるきを行いました。また、相生での昼食とレクチャー・意見交換に続いて関内を巡り、横浜都市発展記念館でミニレクチャー2を行いました。





## 分科会Ⅲ 創造都市とまちづくり 「アート・建築・デザインでまちが変わる」



横浜では、開港以来育まれた独自の文化や歴史に加え、アートがもつ創造性を融合させた「文化芸術創造都市」政策が進められています。リノベーションによる建築物再生・クリエイターの集積など、具体的な取組みの成果が出てきています。分科会Ⅲのまちあるきでは、3グループに分かれてスタジオオープンイベント「関内外オープン」を体験。クリエイターの拠点を訪ね、創造力を活かしたまちづくりの実践の場を視察しました。

### ■ミニレクチャー1 ..... 「横浜市における創造都市施策の展開」 横浜市文化観光局創造都市推進課 係長 新谷 雄一さん



横浜市の創造都市政策は横浜の臨海部を中心に展開しています。この政策は2004年ごろから始まり、予算は約13億円となっています。2014年秋に展開した「東アジア文化都市事業」、2001年に始まった「横浜トリエンナーレ事業」の2事業が比較的大きな取組みの軸で、それぞれに約4億円ずつの予算が組み込まれました。

この2事業以外で最も予算を使っているのが「創造界隈活動支援事業」です。「ヨコハマ創造都市センター」をはじめとする5カ所の「創造界隈活動拠点」を中心に、多様な実践が蓄積されています。

今後は、創造都市に集積してきたクリエイターにまちの活性化の担い手として参画してもらうため、産業とクリエイティブをリンクする「創造的産業モデル事業」を構想しています。さらに3Dプリンターやレーザーカッターといったデジタル工作機械を活用したFabLab(ファブラボ)の支援やその拠点の提供も視野に入れた政策を考えています。

### ■ミニレクチャー2 ..... 「ヨコハマ創造都市センターにおける創造都市の取組」 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 杉崎 栄介さん

ヨコハマ創造都市センター(YCC)は、アーティスト・クリエイターたちが横浜で活動したいと思える環境づくりとして、芸術文化支援・まちづくり・創造産業支援を行っています。

YCCでは、まちづくりを「創造界隈の形成」と位置づけています。「創造界隈の形成」とは、アーティストやクリエイターがある特定の地域で創作・発表・滞在(居住)することを通して、まちの活性化を図ることです。取組みとして、元々横浜にあった歴史的建造物・倉庫・オフィスを

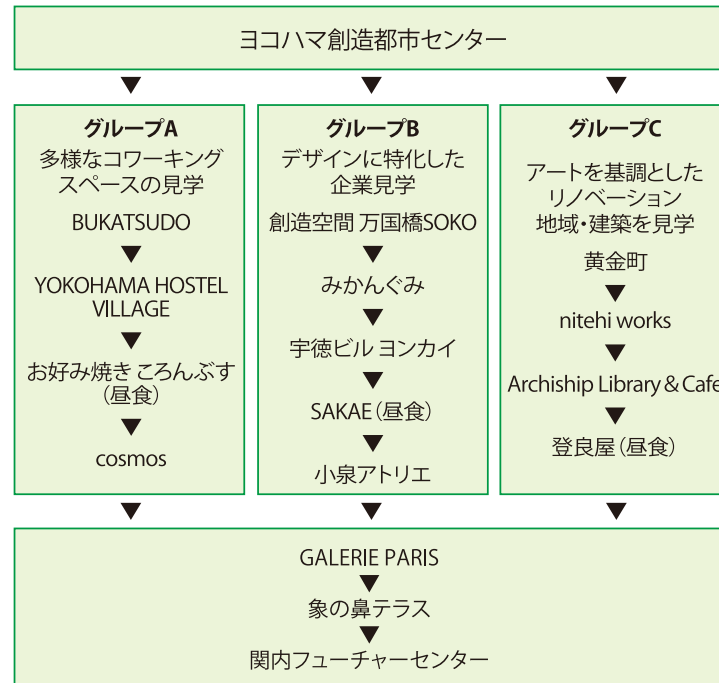


創造的活動の場として転用する「芸術不動産事業」を実施しています。

さらに、オーナー・テナント双方に対する助成、両者をつなげる相談事業等も展開しています。民間不動産物件の掘り起こし、アーティスト・クリエイター向けのリノベーションも推進しています。

YCCは、創造力を持つ人材をまちづくりの中心に置いています。創造的な人たちをまちに誘致、育成することが創造界隈の活性化につながり、芸術と社会の接点が増えると考えています。

### ■まちあるき ..... YCCでミニレクチャーを受けた後のまちあるきでは、テーマの異なる3グループに分かれて、関内周辺で開催中のスタジオオープンイベント「関内外オープン」を体験しました。合流してからは、日本大通りのGALERIE PARISや象の鼻テラスを巡り、関内フューチャーセンターでワークショップを行いました。



### ■ワークショップ ..... ワークショップは番場俊宏さん(株式会社エイバンバ)の進行で進められました。このワークショップでは、まちを見て回った際に撮った写真を使いながら、印象に残った話や風景をグループごとに感想を交えて紹介しました。以下グループ別に参加者の感想を抜粋して紹介します。

○初めて自立支援のお店に行くことができてとても貴重な体験をしました。スタッフもお店の卒業生ということで、どんどんこのようなサイクルが生まれれば良いと思います。(Aグループ:学生)

○横浜市が民間と連携し、リノベーションや創造都市推進を積極的に展開している点は、持ち帰って反映したいと思いました。(Cグループ:自治体職員)





## 分科会Ⅳ オープンデータ 「まちを楽しむ新たな手法」



近年、様々な資料を自由に再利用できるようにする「オープンデータ」の取組みにより、まちの記憶を記録している写真や地図等のデジタル化・公開が進められています。また、オープンデータを活用したまちあるき用のアプリも数多くつくられています。これらを使うことで、まちを深く体験し、楽しむことができます。分科会Ⅳでは、オープンデータについてのレクチャーの後、スマートフォンやタブレットを使い、明治時代以降の関内周辺の古写真や絵葉書などの画像などを見ながらまちを探索する「拡張現実(AR)まちあるき」を実施しました。

### ■ミニレクチャー1 ..... 「横浜市オープンデータの取組みについて」 横浜市政策局政策課係長 関口昌幸さん



横浜市は、市民やNPOなどと連携して様々なオープンデータの推進に取り組んでいます。「公共データの民間開放」によって、経済活性化や行政の効率化を目標としています。

横浜市は2014年6月に「オープンデータ取組方針」をまとめ、「よこはまオープンデータデスク」を開設し、研究

やビジネス展開、地域課題解決プロジェクトなどにデータの活用を促進していく体制を整えました。さらに、7月には「よこはまオープンデータカタログ(試行版)」を公開しています。

オープンデータの活用は、景観まちづくりにとっても意義があります。例えば、横浜の都心臨海部については、開港時以降の景観が記録されたデータがあります。それらを使えば、歴史への理解を深め、街並みをより楽しむサービス・アプリをつくることができます。また、様々な市民の参加により、地理情報システム(GIS)や自治体の保有してきた文化・歴

史コンテンツを活用してもらうことで、創造都市空間の新しい可能性を開いていくことも期待できます。

### ■ミニレクチャー2 ..... 「ARアプリ:横浜フィールドミュージアムAR」 東京都市大学環境情報学部 上野直樹研究室 大崎敬志朗さん

都市の景観情報に、別の価値のある情報を重ね合わせて表示する「拡張現実(AR)」の技術を使ってアプリをつくりました。図書館・博物館・横浜青年会議所・地域のITエンジニアなど、様々な立場の方々から協力を得ました。自治体が公開した画像のオープンデータを、スマートフォンカメラで投影している実際の景観に重ね合わせながら閲覧するしくみです。

具体的には、横浜国立図書館やWikipediaなどから引用した施設やまちの情報、地域の歴史研究グループの協力を得て集めたデータなどを使い、スマートフォンのカメラ越しに見る実際の景観と、横浜浮世絵や戦前の横浜の写真画像などを重ねて「今いる場



所の歴史」を楽しむことができるサービスをつくりました。今後は、適切なコースづくりなど、フィールドに出て見えてきた意見や要望について改善し、多くの人たちに使ってもらえるアプリを目指したいと思います。

### ■まちあるき.....

参加者は、東京都市大学環境情報学部の上野直樹研究室の学生のサポートで、横浜の代表的な観光スポットを巡りました。実際のまちの案内は、横浜シティガイド協会のガイドが担当しました。



- さくらWORKS<関内>
- ▼
- 横浜市開港記念会館
- ▼
- 神奈川県庁
- ▼
- 象の鼻パーク
- ▼
- 横浜港大さん橋  
国際客船ターミナル
- ▼
- 横浜マリンタワー
- ▼
- 横浜公園
- ▼
- さくらWORKS<関内>

訪れた各スポットで、参加者が思い思いにスマートフォンをかざしてアプリを使いました。例えば、1917年(大正6年)にできた横浜市開港記念会館は、関東大震災で崩壊し、昭和期に建て直されています。初代の建物の画像と、現在の画像をARアプリで重ねて眺めることで、現在の建物と昔の様子を同時に捉えることができました。こうしたアプリを通して、横浜の「今」だけでなく昔を追体験し、より深く知ることができました。



### ■ワークショップ.....

まちあるきの後、参加者はさくらWORKS<関内>に戻り、感想を共有し、自分たちのまちでできそうなことや、やってみたいアイデアについて活発に意見交換しました。

各都市の参加者からは「災害時に危険な場所がわかる」「昼間に行った場所の夜景を写真で見える」「画面を見ながらのナビゲーションは危険なので、音声を活用するガイドアプリはどうか」などのアイデアが出されました。さらに、「情報技術が進んでも、潮の匂いや風の強さなどは実際に行かないとわからない」「魅力ある場所の紹介に役立つ」「IT好きと郷土史好きが一緒にプロジェクトをつくることのできる貴重な場」などのアプリを使った意見・感想がありました。





# オプションツアー 「神奈川宿における開港と移り変わり」



江戸時代からの宿場である「神奈川宿」は、開港から明治維新へと横浜が大きく変わった時に、どのように変化し、どのように文化が引き継がれていったのでしょうか。今大会のオプションツアーは、幕末の文久3年(1863年)から続く神奈川宿の老舗料亭田中家で開催されました。レクチャーや料亭体験など、神奈川宿の歴史や芸能を感じる機会になりました。

オプションツアーでは、乾杯を皮切りに横浜開港資料館・横浜都市発展記念館副館長の西川武臣さんによる神奈川宿についてのレクチャーが始まりました。

レクチャー後は、春日流師匠の春日豊比佐さんの小唄や端唄、花柳流師匠の花柳伽桜羅さんの踊り、横浜大会実行委員会副会長の宮川眞壽美さんの三味線が披露されました。江戸時代から続く老舗の雰囲気と唄や踊りに、参加者の方々も箸を止めて楽しんでいました。

続いて、横浜発祥といわれているお座敷遊び「野球拳」を

行いました。元々お座敷遊びとして野球拳は広く知られていますが、参加者の中でも実際に体験したことのある方は少なく、宮川さんによる基本的なルール説明の後にチャレンジしました。今回は参加者が多かったため、音楽に合わせてじゃんけんする簡単なルールで、5~6人で行いました。普段体験することのないお座敷遊びに、会場は大いに盛り上がりました。

そのほか、江戸時代より続く伝統料理など、横浜の歴史の味と芸能を満喫しました。



■レクチャー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
「開港場横浜と神奈川宿」  
横浜開港資料館・横浜都市発展記念館  
副館長 西川武臣さん

神奈川宿は東海道有数の宿場で、江戸時代を通じて地域最大の町として発展してきました。そのため、この宿場は横浜開港後も港を様々な形で支える役割を果たしました。

神奈川宿には、大正時代まで続いた中心街である台町がありました。台町には千石船が係留できる港があり、大阪や兵庫、三陸、新潟、北海道などの物産が流通していました。様々な商人が台町へ物産を求めてやってくることから、神奈川宿は流通の拠点として大きくなりました。

神奈川宿前の海には、開港当時、港の砲台場である神奈川台場が設置されていました。これは国際都市として開港するにあたり、発展するための防衛策として幕府が設けたものです。また、もう一つの意味として、外国の公使・領事が日本へ着任した際の礼砲や、国交を結んだ国の大統領や国王の誕生日の際の祝砲を撃つ役割を果たしていました。神奈川台場は、現在は埋め立てられていますが、横浜の海岸沿いに残っています。



■田中家について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

文久3年(1863年)から続く神奈川宿の「田中家」は、幕末から明治へと移り変わった激動の時代、伊藤博文や西郷隆盛、高杉晋作なども訪れた老舗料亭。当時は、海に臨む絶景を間近に見られる宿でした。また、坂本龍馬の妻「おりよう」がここ田中家で仲居として働いていたことも有名です。現在ではその数々の偉人の記念品などが廊下などに飾られています。





## 代表者会議 / 全体会議 II



代表者会議では、各都市のまちづくり団体代表と行政代表が集まり、横浜大会の所感を述べあい、大会宣言の確認を行いました。また、次回の開港5都市景観まちづくり会議を神戸で開催することを決定しました。

全体会議 II では、各分科会の報告と総括が発表され、大会宣言が採択されました。また、2015年度の開催地である神戸市へ大会旗が手渡されました。

### ■分科会報告

分科会 I 一般社団法人美港都市横浜を創る会

近藤 裕之 さん

分科会 II NPO法人横浜シティガイド協会 嶋田 昌子 さん

分科会 III 宇徳ビルヨンカイ 番場 俊宏 さん

分科会 IV NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ

杉浦 裕樹 さん

それぞれの分科会の内容を報告しました。

### ■大会総括

開港5都市景観まちづくり会議横浜大会実行委員会

監査役 小林 光政 さん

これまでの開港5都市の歴史は、これからの事業の展開で最も大切な人間関係の形成にあったと思います。これからグローバル化はより一層進んでいき、都市間競争も厳しくなっていきます。そのような社会の中でこれから生き残っていくためには、人間関係の形成から生まれた郷土愛がキーワードとなると思いました。



### ■次回開催市挨拶

旧居留地連絡協議会 野澤 太一 さん

今回の横浜大会は、これまでの大会とは違い、都市・民間・大学が連携してまちづくりをしている目新しい切り口での報告が多かった印象を受けました。また、クリエイターやデザイナーを大切に育成しているなど感じました。神戸ではなかなか見えない光景だったので参考にしたいと思います。

来年は神戸市として今年に負けないくらい精一杯大会をつくりますので、皆様のご参加をお待ちしております。



## 大会宣言

開港5都市景観まちづくり会議の記念すべき20回目の大会をここ横浜で開催した。「開港5都市のみらい これからもココから」をテーマに、開港都市の原点である港を振り返り、魅力と個性を探った。そして交流を深め、語り合い、景観まちづくりの次なる展開に向けて、その可能性を考えた。

開港都市は、それぞれの都市に共通するまちの生い立ちと、それぞれの都市がもつ魅力と個性を先人たちから資産として受け継ぎ、それを基礎として景観まちづくりに取り組んできた。

そして、これからは、これまで受け止めきれなかった新たな課題や手法にも取り組んでいきたい。そのヒントは、これまで積み重ねてきた20回の交流の蓄積の中にある。

この会議を通じて新たな担い手を増やし、互いの友情を深め、見聞を広め、刺激あうことで、景観まちづくりの活動が発展的に継続し、これからも開港の地が世界に向けた文化の発信地でありつづける。

このような意義を再確認し、われわれは開港5都市景観まちづくり会議を続けていく。

本大会に参集した市民が、体験し感じたことを糧として、魅力と個性のある景観まちづくりに努めることを確認し、ここに宣言する。

2014年10月19日 開港5都市景観まちづくり会議横浜大会





## 開港5都市景観まちづくり会議の沿革

第1回	1993年8月	神戸大会	「坂のまちと旧居留地」
第2回	1994年10月	長崎大会	「市民主導のまちなみ・まちづくり」
第3回	1996年2月	新潟大会	「港といっしょになった都市, 一体となった都市って何だろう」
第4回	1996年10月	函館大会	「北の開港都市に民の系譜をさぐる」
第5回	1997年10月	横浜大会	「開港都市の伝統・文化を活かした街づくり」
第6回	1999年10月	神戸大会	「開港都市の未来(あした)を探る」
第7回	2000年10月	長崎大会	「開港都市の遺伝子を伝える」
第8回	2001年8月	新潟大会	「水都にいがた夏!!ようこそ」
第9回	2002年10月	函館大会	「いいべや『港・まち並み』考えよう」
第10回	2004年3月	横浜大会	「150年の歴史とにぎわいづくり」
第11回	2005年10月	神戸大会	「開港都市のさらなる飛躍～明るく元気!!～」
第12回	2006年9月	長崎大会	「開港によってもたらされて文化と歴史の継承」
第13回	2007年10月	新潟大会	「実りの秋 にいがたへ来なせや」
第14回	2008年10月	函館大会	「新・函館探訪～呼吸(いき)づくまを未来へ繋げ～」
第15回	2009年9月	横浜大会	「150年の贈り物～新たな旅立ちへ～」
第16回	2010年10月	神戸大会	「共生のまちづくり～時間・空間・文化を超えて」
第17回	2011年11月	長崎大会	「愛・絆・希望 5港の祈り～長崎から～」
第18回	2012年10月	新潟大会	「新潟の『らしさ』を求めて～過去・現在・未来へのつながり～」
第19回	2013年9月	函館大会	「再発見!“ひと”と“まち”をつなぐもの～開港と食とラボ～」
第20回	2014年10月	横浜大会	「開港5都市のみらい これからもココから」

開港5都市  
景観まちづくり会議

## 各都市参加団体/実行委員会構成団体

### 【函館市】

函館の歴史的風土を守る会  
函館市伝統的建造物群保存会  
一會の会  
函館市役所

### 【新潟市】

サンクプロム石山商店街協同組合  
協同組合新潟あきんど塾  
にいがた花絵プロジェクト実行委員会  
NIIGATA光のページェント実行委員会  
新潟学の会  
ユニバーサルカラープランナー協会  
NPO法人 新潟水辺の会  
NPO法人 ボランティア亀田  
歴史都市新潟研究会  
NPO法人にいがたエキナカン会  
新潟市役所

### 【神戸市】

北野・山本地区をまもりそだてる会  
旧居留地連絡協議会  
美しい街岡本協議会  
南京町景観形成協議会  
新長田駅北地区東部いえなみ委員会  
三宮中央通りまちづくり協議会  
神戸元町商店街まちなみ委員会  
(株)地域問題研究所  
神戸市役所

### 【長崎市】

深堀地区まちづくり推進協議会  
三ツ山町犬継地区景観まちづくり協議会  
十善寺地区まちづくり協議会  
南山手地区町並み保存会  
平和公園地域まちづくり協議会  
大浦青年会  
長崎市役所

主催:開港5都市景観まちづくり会議横浜大会実行委員会

### 【構成団体】

伊勢佐木町1・2丁目地区商店街振興組合  
協同組合伊勢佐木町商店街  
NPO法人横浜シティガイド協会  
関内まちづくり振興会  
協同組合元町SS会  
公益社団法人神奈川台場地域活性化推進協会  
日本大通り活性化委員会  
馬車道商店街協同組合  
BankART1929  
商店街振興組合元町クラフトマンシップ・ストリート  
山下公園通り会  
横浜中央地下街商店会  
横浜中華街発展会協同組合  
横浜の観光を考える会  
吉田町名店街会  
宇徳ビルヨンカイ  
大さん橋国際客船ターミナル  
関内・馬車道エリアマネジメント連絡協議会  
NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ  
株式会社tvkコミュニケーションズ  
mass×mass関内フューチャーセンター  
ヨコハマ創造都市センター  
(公益財団法人横浜市芸術文化振興財団)  
公益社団法人横浜歴史資産調査会  
一般社団法人美港都市横浜を創る会  
横浜の文化でまちづくりプロジェクト

事務局:馬車道商店街協同組合

共催:横浜市都市整備局

発行年月: 2015年3月  
編集・発行: 開港5都市景観まちづくり会議横浜大会実行委員会  
編集協力: NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ  
デザイン: コバヤシイッセイ